サムエル記　1、2
サムエル記第一と第二 現代の聖書ではサムエル記は二つ
に分けられていますが 元々は一つの書でした今回は第一
サムエルを取り上げます エジプトで奴隷の状態から救い
出されたイスラエルの民は 神とシナイ山で契約を結びつい
に約束の地に入ります イスラエルの民はそこで誠実に
神の契約の戒めに従うはずでした これより前の士師記の時代イスラエル
は契約を全く守れず 失態の連続でした道徳的に混沌
とした時代でイスラエルは知恵 のある誠実な指導者を必要として
いたのです サムエル記は 3 人の主要人物に焦点
を当てています書のタイトルにも なっている預言者サムエルそれ
にサウル王とダビデ王です この三人によってイスラエルは
士師を指導者とする部族の集まり からダビデが治める統一国家へ
と変わっていきます サムエル記の構成は見事で 4 つの
大きなセクションが三人の人物 の
物語を紡いでいます 預言者サムエルは最初のセクション
の中心人物ですがサウルのストーリー である次のセクションでも重要な
役割を果たします このセクションは更に二つに分
かれていて前半はサウルが権力 の座に就いたのちの失敗を後半
は彼の失脚と悲劇的な死を綴って います
そしてサウルの衰退と対照的に ダビデは力をつけていきます
ダビデのストーリーも前半と後半 に分けられています
前半ではダビデの勝利と成功が 続きますが後半では大失敗をし
彼の家庭も王国も崩壊していき ます
最後のセクションはこれまでの 出来事を振り返ります
それではストーリーを詳しく見て いきましょう
最初のセクションは士師記の混沌 とした背景からハンナという女性の
感動的な物語で始まります子どもの いない彼女は深い悲しみの中にい
ましたが神の恵みによってつい に子どもが与えられサムエルと
名付けました 二章では彼女はその喜びを祈り
に込めますその内容は神は高ぶる 者に敵対し謙虚な者を引き上げ
たとえこの世に悪と悲しみがあった としても神はやがて目的を成し
遂げるというものです またいつの日か神が油注がれた
王を送ると宣言しています この詩はこれからのストーリー
展開を紹介するために冒頭に 置かれています

サムエルは成長しイスラエルの 偉大な預言者
また指導者になります 時を同じくしてペリシテ人が力
をつけ イスラエルの宿敵になります
重要な戦いの最中傲慢になった イスラエル人は
神に祈って助けを求める代わり に
契約の箱を勝利をもたらすお守り のように持ち出してしまいます
そのため神はイスラエルの敗戦 を許し契約の箱は奪われました
ペリシテ人は契約の箱を 彼らの神であるダゴンの神殿の中に
置きました するとイスラエルの神は軍隊も
必要とせず 災いを送ることによってダゴン
とペリシテ人を打ち砕きます ペリシテ人は契約の箱を手放したく
なりイスラエルに返します さてこのストーリーのポイント
ですがまず神はイスラエルのお守り ではないということまた神は高
ぶる者に敵対するということです ペリシテ人に限らずイスラエル
人であったとしてもイスラエル が神の契約の祝福を望むのであれば
謙虚で従順でなければいけません 次のセクションではイスラエル
の民がサムエルのところに来て 私たちも他の国々のように王が欲しい
から探してくれ と言います
サムエルはこれが気に入らず祈 ったところ神は彼らの動機は間違
っているがもし王を望むなら与 えようと言いました
こうしてサウルが登場します サウルは背が高くかっこよく王
として有望でしたが 人格に大きな問題がありました
彼は不正直で誠実さに欠けていて 失敗を認めることができず
これらの欠点のために失脚します 序盤ではサウルはいくつかの戦
に勝ちますが 彼の落ち度は決定的で神へのあ
からさまな不従順のため 王にふさわしくないことが明らかに
なります サムエルはサウルとイスラエル
に向かって イスラエルに益をもたらすのは
謙虚で神に忠実な王であり そうでなければ逆に国を亡ぼすと
警告しました そして神は新しい王をたてサウル
を退けると伝えます こうしてサウルの失墜が始まる
と同時に 神は新たな王を準備していました
それはダビデという名もない羊飼い の少年で
王になるとはとても思えない人物 でした
しかしあの有名なゴリアテとの 対決のエピソードは
神がダビデを家柄ではなく 大胆かつ謙虚な信仰のために選んだ

ことを教えてくれます ここにもハンナの詩のテーマが
現れています 高ぶるサウルとゴリアテは低くされ
謙虚なダビデが高くあげられる のです
ここからサウルは正気を失い始め ダビデは力を増し加えていきます
サウルの将軍になったダビデは 多くの戦に勝ち
人々からの名声をも勝ち取って いくのです
ダビデを妬んだサウルは彼を追いかけ 捕まえ
殺そうとしました ダビデは何も悪いことはしていません
が荒野に逃げて身を隠します ここでダビデの真価が分かります
彼にはサウルを殺すチャンスが 何度もありましたが
決して手はくださなかったのです サウルの行った悪にも関わらず
ダビデは神ご自身がイスラエル のために王をたてると信じてい
ました 詩篇にはこの時期のことをうた
った詩がたくさんあり それらは神への信頼を表しています
このセクションはペリシテ人との 戦に負けたサウルの悲惨な死をもって
幕を閉じます 第一サムエルのストーリーは緻密
です サウルとダビデの人物像はとても
リアルで 私たちは彼らと自分を重ね合わせ
ながら読み進めます 例えばサウルのストーリーから
は自分の欠点を認め それが引き起こす悪影響を理解
し へりくだって神様により頼みな
がら心の闇と向き合わなければ サウルと同じ運命を辿るということ
を学べます それとは対照的にダビデは神様の
タイミングを信じ 忍耐をもって待つことの模範です
サウルに追われ荒野を逃げ回って いた時
ダビデは神に見捨てられたと思 ってもおかしくなかったのに
そうは思わなかったのです ダビデのストーリーはこの世に
悪があったとしても 神は高ぶる者に敵対し謙虚な者
を引き上げ ご自分の目的を成し遂げること
を教えてくれます これが第一サムエルです

500字要約

サムエル記第一は、現代の聖書ではサムエル記第一と第二に分かれていますが、元々は一つの書でした。本要約では第一サムエルを取り上げます。
物語はエジプトでの奴隷生活から救い出されたイスラエルの民が神とシナイ山で契約を結び、約束の地に入るという出発点から始まります。しかし、イスラエルの民は約束の地で神の戒めに忠実に従うべきであったにもかかわらず、士師記の時代には契約を守ることができず、道徳的な混乱が続いていました。
サムエル記は主要な人物である預言者サムエル、サウル王、ダビデ王に焦点を当てています。これらの人物によって、イスラエルは士師からダビデによる統一国家へと変わっていきます。
サムエル記は見事に構成されており、三人の主要人物の物語を四つの大きなセクションに分けて語られています。最初のセクションはサムエルに焦点を当て、次にサウルの物語、そしてサウルの物語はサウルの失敗と退位、最後にダビデの物語に移ります。
サウルは有望な王として登場しますが、不正直で誠実さに欠け、神に対する不従順により失脚します。その後、神は新たな王をたて、それがダビデです。ダビデは謙虚で信仰深い少年で、ゴリアテとの対決を通じて神の選ばれた者として示されます。
ダビデはサウルに追われながらも、サウルを害することなく、神の計画を信じて待ち続けます。サウルの衰退と対照的に、ダビデは力を増し加え、人々からの支持を集めます。
サムエル記は、自己認識、信仰、忍耐のテーマを通じて、サウルとダビデの物語を通じて多くの教訓を提供しています。ダビデの信仰と忍耐は神の計画を信じる模範となり、サウルの高ぶりと不従順からの教訓も含まれています。
この書は、イスラエルの歴史と神の摂理についての重要な教訓を伝えるものであり、信仰と従順の重要性を強調しています。